



現在の様子（案内板もある）

平安時代のはじめ頃、若旅（中村地区）の光明寺というところに芳賀郡の役人である下野公豊継という人がいました。その人には、とても仲のよい奥さん（節婦という）がいました。

しかし、823年に豊継が病気のために亡くなってしまうと、節婦はとても悲しみました。節婦は豊継の墓のすぐそばに小さな小屋のような家を建て、そこに住みながら一日中お経

を唱えていました。節婦の豊継を亡くした悲しみは、日がたつにつれて深くなり、一日中泣いているようになってしまいました。その泣き声は里じゅうに聞こえ、泣き声を聞く里の人々も同じように悲しみに包まれていました。

亡くなった夫を思う、光明寺の節婦の話は、里から里に伝わって、とうとう都におられる嵯峨天皇の耳にも入りました。天皇も亡くなった夫を思う節婦の気持ちに感動し、「少初位上※注」の位を受け、税を免除するなどの優遇をして、お褒めの言葉を贈りました。

節婦は、その後も悲しみの涙を流し続けて一生を終えました。里の人々は節婦を手厚く葬りました。その場所が、この「光明寺節婦の墓」のあたりだと言われています。



田畑の間 道路脇にたたずむ

※注： この時代の地方の役人などに与えられた位。位は誰にでも与えられるものではなく、王族や貴族、ある程度重要な立場の役人などにしか与えられなかった